

研修ニュース

〒518-0814 三重県伊賀市上友生 785 番地

TEL&FAX : 0595 (21) 8839

E-Mail : iga-ken@iga.ed.jp



研修講座 B-11「外国人児童生徒教育①」を実施しました！ 「外国につながる住民と伊賀市で共に暮らすには ～最新情報を踏まえて～」 伊賀市外国籍児童生徒日本語指導コーディネーター 船見和秀さん

5月22日(金)に、「外国人児童生徒教育①」の研修講座を行いました。

船見先生から多くの指導の視点を教えていただきました。ここでは2つ紹介します。1つ目に、「学校全体が日本語を習得する環境であるという意識が重要」ということです。例えば職員室に鍵を取りにきた子どもがいたとします。「先生、鍵！」と言ったならば、「先生、〇〇の鍵を取りにきました。貸してください」と教師が正しい話し方を伝え、「日常的に『丁寧に話す』ことをその場でさせてほしい」と話されました。日本語の使用場面をとらえて、日本語をインプットすること、加えて「正しく話す」というアウトプットが大切であるご教示いただきました。



2つ目に日本語学習の支援で留意したいこととして「生活言語能力(日常生活で日本語を使って話すことができる)と学習言語能力(日本語で自分の考えを書いたり、発表したりできる。また言葉の意味を理解できる)」とは違うという点です。学習言語を習得するには、生活言語のそれより4年～5年多い期間が必要というお話でした。船見先生は「この差を埋めていく必要がある」と話されました。例えば算数で「底辺が15cmで高さが8cmの三角形の面積を求めましょう」という問題があったとします。「底辺」「求めましょう」という言葉は、生活場面でなかなか使わない言葉です。そこに指導者が気づき、文字カードを作ったり作図をしたりして視覚的支援をすることや、短く言い換えることで、子どもたちの理解の一助となります。さらに理解を深めるためには「先生が全て言ってはいけない。子どもたち同士で確認を！子どもたちに教えながら、子どもたちと対話をしてほしい」と私たちにとって重要な視点を示していただきました。

ご参加いただいた先生方には今後の実践に活かしていただくとともに、各校で還流いただきますようお願いいたします。

アンケートより【一部抜粋】

・「日本語教育と教科学習支援、日本語指導」について、あらゆる機会をとらえて・・・は意識しているつもりですが、改めて意図的に伸ばす工夫をしていかないといけないと思いました。日頃の指導をふり返ると、「使わせること」をあまり意識せず、自分がしゃべってしまっていると反省しました。改善していけるようがんばります。【小】

・教科学習支援についてのところが、とても印象に残りました。私は数学を担当しているのですが、「底辺・高さ」といった用語だけでなく「求めましょう」「～に対する」など、普段無意識に使ってしまっている言葉が、子どもにとってわかりにくくなっていると知りました。文は短く「1つの文に1つの意味」にすること、機能語を使わないなど、日頃から気を付けていきたいです。

【中】